

## 準備通貨ポンドの凋落とスターリング協定

名古屋大学 金井 雄一

第二次大戦後におけるイギリス経済の地位低下は明白だったので、ポンドの衰退も当然の現象と思われがちだった。しかし、戦後のポンドの歩みを一方的な衰退に解消してしまう把握には、実は問題がある。たとえば、ポンドは確かに最終的に衰退したとしても、ロンドン国際金融市場すなわちシティは復活を遂げた。周知のごとく、今日においてもロンドンには世界有数の国際金融センターである。戦後ポンド史を単純な衰退過程として捉えていると、このような現実とそこに潜む意味を見過ごしてしまうことになる。逆に、現実に生じた多様な事態を発掘してポンドを一面的衰退史から救い出そうとする視点に立つと、これまで衰退街道に立つ一里塚としか見られなかった1947年の交換性回復挫折、49年の切下げ等々の事態が持つ、ポンド復権に繋がる側面を浮き彫りにしていけるのである。

その方向への試みは、ポンド凋落という事態が、必死の抵抗にも拘らずつい起こってしまい、止むを得ず受け入れられたというものであっただけでなく、「凋落」の中に自ら位を譲ったという要素もあった点を明らかにするだろう。そして、1970年前後にポンドを巡って起こった事態は、ポンド凋落を「譲位」の要素をも踏まえて捉えるとき、初めて正確に理解されると思われる。本報告は、そのような問題意識から行なう戦後ポンド史再検討という大枠の中から、スターリング協定（Sterling Agreements）を論点として取り上げ、準備通貨ポンドの凋落という現実をイギリス当局が受け入れていく過程の中に「譲位」の要素がどのように関連していたかを検討しようとするものである。

1968年のポンド危機に際してポンド支援のための第二次バーセル協定が検討されていた68年7月、中央銀行総裁たちが支援の前提として「満足できる協定がスターリング地域諸国と締結されるならば」という条件をつけた。そこで、当面のスタンドバイ・クレジットが必要なイギリスは、「最低スターリング比率を維持するという約束と交換に公的スターリング保有額の大部分に対して保証を提供する」（TNA: T 267/29.）スターリング協定を各国と締結していったのである。68年9月に締結されたスターリング協定は71年9月に2年間延長され、さらに73年9月に6ヵ月の再延長が行なわれ、74年4月に9ヵ月の再々延長が実施されたが、74年12月末に廃止された。

報告では、イギリスのEEC加盟やスターリング地域崩壊にも触れつつ、スターリング協定の延長と廃止の過程で準備通貨ポンド放棄へと政策が収斂していくことを示し、ユーロドル市場の中心になったシティ、準備通貨ポンドに由来する制約から解放を求める志向など、「譲位」の要素との関連を考察したい。